

2020年度入学試験問題

注 意

- 一 問題冊子は一冊(十五ページ)、解答用紙は二枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子は必ず持ち帰りなさい。

国 語

問題 一

次の文章は、倫理学における「運」の扱いについて探究した著書の終末部分である。これを読んで、後の問に答えなさい。

個別の人生の実質を考慮した実存の問題の探究というのは、学問ではなく文学に任されるべきものだ、という見方もあるかもしれない。確かに、アンナの人生はそれこそ『アンナ・カレー二ナ』という長編小説で描き取られたものであるし、テオグニス^{注一}の問いやオイディプスの懊悩^{おのの}なども、詩や演劇のなかで表現されたものだ。

しかし、文学作品において主題的に扱われるものは学問の対象にはなりえない、ということが必ず言えるとは限らない。むしろ、学問と文学の主題は完全に分けられるべきだとするならば、学問が捉える人間の生というものは、常に不正確で、決定的な部分が欠けたものとならざるをえない。A、ときに狭義^{注二}の道徳をはみ出す個々人の置き換えのきかない問題が、学問では扱えないものとなってしまふからである。実際、この問題に最も接近するはずの倫理学という学問は、一般理論の構築やケントウ^アという課題に注力する一方で、個々人が送る個別の人生と、その不可欠な要素としての運の問題をなおざりにする傾向が強かったと言える。

これに対してウイリアムズ^{注四}は、人生のかけがえなさや運の問題はまさに倫理的探究に含まれると考える。それは、人間の生をあるがままに全体として捉えようとする、ある意味では極めて野心的な立場である。いかに生きるべきかを問いつつ生きる、当の人間とはいかなる存在なのか、それが彼にとつての倫理学の問いなのである。

はたして、「人間の学」たる倫理学は——すなわち、道徳や倫理をめぐる人間の思考は——運の要素を完全にハイジヨ^イすべきなのか、あるいは、狭義の道徳的運の問題を取り込むべきなのか、あるいはまた、広義の道徳的運（倫理的運）の問題をも含んだかたちで、実存の領域へと踏み込むべきなのだろうか。運をめぐるウイリアムズの特異な思考は、そもそも倫理学とはどのような営みなのか、さらには、人文学や科学等の学問は人間の何を問い、何を明らかにしようとしているのか、その基本の問題をあらためて我々に突きつけるものだと言えるだろう。

ここでは、この問題自体にさらに分け入っていくことはできない。とはいえ、道德と実存の問題にまたがる倫理学探究の内実を、もう少しだけ明確にしておくことはできる。

一般的な義務やキハ^ウン、法の原理を考えると、運とは得てして、理想や予想を裏切り、秩序や安定を乱す厄介者として捉えられがちである。B、倫理学上の理論では、あたかもこの世に運など存在しないかのように、この要素を無視して議論が進められていく傾向が強^クく見られる。

こうした傾向は、たとえば物理学の基礎的な計算問題などで、摩擦というものの存在がときに無視されることに比されるかもしれない。あるいは、現代の哲学者のルートウィヒ・ウィトゲンシュタインが、論理的に構築された自らの言語理論を、滑らかな氷の上の世界に喩^なえていることも関係づけられるだろう。

そこには摩擦がなく、ある意味で条件は理想的なのだが、しかし、だからこそ我々は歩くことができない。我々は歩きたい。そのためには摩擦が必要なのだ。ザラザラした大地に還^{かえ}れ！(ウィトゲンシュタイン『哲学探究』一〇七節)

理想的な条件を設定しようとするとき、人はしばしば「摩擦」の存在を無視しようとする。しかし、実際のところ、摩擦がなければ物が動くことも人が歩くこともできない。右の引用でウィトゲンシュタインが想定している議論領域である「言語哲学」を「倫理学」へ、そして、「歩くこと」を「生きること」へと置き直すならば、右の引用はウィリアムズの問題意識として読み替えることができる。すなわち、摩擦は——つまり運は——Cではなく、D要素なのだ、と。

倫理学上の理論を通して世界を眺めている場合はともかく、現実の生活において我々は「摩擦」ありきで生きている。すなわち、運の影響から目を背けるのではなく、多かれ少なかれ、運の産物を自分自身をかたちづくる一部として引き受けている。

ただし、⁽¹⁾その引き受け方は様々だ。たとえば、偶然と思われたものは実は必然だった、という風に捉えられる場合もあるだろう。

う。幸運や不運によつて我が身に起こつた出来事を、本人が自分の人生における本質的に重要な部分として位置づける場合には、そうしたいわば偶然の必然化のプロセスが迎^{たむ}られてゐる。それはまさしく、当該の出来事をまさに運命として受けとめていくプロセスだとも言える。

他方で、偶然をあくまで偶然として受けとめつつ、その偶然の結果を引き受ける、ということもありうるだろう。それは、自分の人生の諸局面に対してことさらに意味づけを行うことなしに、ともかく、そうなつてきたことの集積として、自己とその生の中身を受けとめることである。人生に対するこうした態度は、刹那的とか無責任といった非難を浴びるかもしれないし、あるいは、意味づけにとらわれた世界観から抜け出した軽やかな態度、といった評価を受けるかもしれない。ただ、いずれにせよここでおさえておくべきなのは、さしあたり、そうした引き受け方も確かに可能だ、ということである。

運とは本来、偶然的な作用と必然的な作用の両面を意味しうる概念である。運はときに運命と化す一方で、^エジュンスイな偶然という側面のみ焦点化されるケースも多い。そして、偶然なのか必然なのか、がそもそも判然としないケースにも、しばしばこの概念が適用される。運という概念のこうした両義性や曖昧性は、我々の生き方の個性と、その個別の生き方の複雑性を反映している。その意味で、^②運という捉えがたい概念を手放さないことは、個々の人生の実質を手放さないことに直結するのである。

(古田徹也『不道德的倫理学講義』による)

注一 テオグニス^テ運命の不等さと不可知さを詠った、紀元前六世紀ごろの詩人。

注二 オイディプス^オ紀元前五世紀の作家ソポクレスが描いた悲劇『オイディプス王』の主人公。苦悩する人物として描かれる。

注三 狭義の道徳^ニおよそ人一般にとつて正しい個々の行為とは何かを問うもの。それに対して、「広義の道徳」は、私ほどという生き方を選び取るべきかという問題も含むため、「狭義の道徳」に反する生き方も考慮の対象となる。著者は、例としてゴーギャンが芸術家としての飛躍を期して、妻子を捨ててタヒチに渡航し長く滞在したことを挙げ、家族を捨てる

という行為が道徳的に許されないと考えるのが「狭義の道徳」であり、それはわかっているながら、自分は画家として生きるべきだとタヒチ行きを決め、結果成功を収めているゴーギャンの行為が正当化されると考えるのが「広義の道徳」だと説明している。

注四 ウィリアムズイギリスの倫理学者。二〇〇三年没。「道徳的運」をめぐって論を展開した。

問一 傍線部アイウエを漢字に直しなさい。

問二 、に入る適切な言葉を、次の語群の中から選んで答えなさい。

つまり それゆえ しかし あるいは というのも

問三 空欄 に入る内容を考えて答えなさい。

問四 傍線部(1)について、その理由を説明しなさい。

問五 傍線部(2)は、具体的にどうすることか、本文全体の趣旨を踏まえてわかりやすく説明しなさい。

十三歳の岩助は放課後セイと二人きりで、燃料となる松葉をかき集めて来る仕事を、山椒谷さんしょうでするのを楽しみにしていた。しかし、五日前からセイが急に山椒谷に来なくなってしまった。以下の文章を読んで、後の間に答えなさい。

岩助は山椒谷を下って、また斜めにその谷を上ると、野呂山の谷のはずれに出た。彼はそこから松の木越しにセイの姿を鋭くさがして見た。が、見覚えのある赤い半幅帯注一は彼の目にとまらなかった。彼は暫くしばし気がぬけたようにそこにしょんぼりと佇たっていた。と、不意に、

「いーわーやーん」

谷の底の方から声を揃そろえて彼の名前を呼ぶ声が聞えて来た。彼は思わず声の方を見下ろした。松の幹の間の隙すきから、数人の山友だちがこちらを見上げていた。

岩助ははたと当惑した。返事が咽喉のどにつまって出なかった。近頃、彼は山行きに友達をちつとも誘わなかったし、また誘われても体よく同行を避けていた後ろ暗さが、まず **A** を衝ついた。が、そんな彼には何の遠慮もなく、彼等は更に大きく声を張り上げた。

「岩やん言うても返事がない

ええ嫁さんでもとったんか

山椒谷のまん中で

何やらこそこそやりようた」

合唱は谷の周囲に木霊こだまして、林がもとの静寂にかえった。困憊こんぱいした彼の心臓も、ようやく仕方のない度胸を据えて来た。わざとらしい眩くらき笑いを背後に感じながら、彼はもとの谷へひきかえした。

隠し事を胸に持つ岩助は、それだけのことよって一切の情勢を敏感にかぎとった。(2) セイのこのごろの落着きのない挙動も、

山椒谷にやって来なくなつた理由も、やっと氷解することができた。

歛よろびは束の間つかに過ぎなかつた。学校に行つても、いやな嘲笑を浴びせられるばかりでなく、どうかすると仲間のものから撥はね除のけをくわされた。家にかえれば帰かへつて、歛よろびを失なつたうけ注二とりだけは厳然と控えていた。余儀ない胸を抱いて、彼は孤独の山へ上あつて行かなければならなかつた。

松葉を搔かきよせる彼の手から、急に力がぬけて来た。搔かきよせても搔かきよせても、仕事は一向はた捗たらない。それに秋の日は日に短くなる。太陽が山のうしろに沈んでしまつても、彼のうけとりはまだ完成しないほどになつて来た。

ある夕方、彼はやつこのことどうけとりの荷をこしらえて、帰りの支度にとりかかつた。林の中はもうよほど薄暗くなつていた。彼は少し廻まり道にはなるが、幅の広い寺道の方へ出ようと、小急ぎに寺の裏の方へ下りて行つた。

「あー！」

寺の裏まで下りて来た時、彼は蛇に出逢あつた時のように一步後ろにたじろいだ。寺の周囲をぐるりと廻めぐらした白壁の土塀に、黒い影がひとつ寄添よつていたのであつた。しかも影はかすかに揺れながら、きゅきゅと妙な音をたてている。

「幽霊！ いや、そんなものはこの世におりやせん」

彼は自分に言いきかせて、わざと平気をよそつて、どうしても通らねばならない土塀に添そつた道を影の方へ近づいた。

「あらー！」

と、小さく影が叫んだ。

「あー！」

と、岩助も思わず応じた。こわごわに目を据えて見ると、彼は二度びつくりした。セイが藁草履わらを右手に持つて立っているのであつた。二つの顔がしばらくの間、薄暗うすやみの中でじいっと見合つた。

「私わら、困るわあ」

先まず救いを求めるかのようにセイは一步前にすすみ出た。

「どうして？」

と岩助は落着いた調子で訊き返した。

「どして言うたて、これ見んやいな、これ——」

彼女はおろおろ声で白壁の土塀を指さした。

彼は目を近づけて見た。土塀の白壁の上に、岩助とセイに関する落書が、薄暗の中にもくつきりと浮いていた。落書は文字ばかりではなく、そのほとりに更に絵画が描かれて、いやが上にも効果を添えていた。

「こそ」

今までそれを皆目しらないでいた彼は思わず歯をくいしばった。書き手に対する忿怒ふんぬがはげしくこみ上げて来た。が、彼はそれをぐっと抑えて口を開いた。

「何じゃい。これ位のこと。消してしまや、ええがな」

「でもな消しても、消しても、なんぼでも書くんじゃもの」

「なんぼでも？」

「こないだから私わたくし、なんぼ消したか分りやせんに」

岩助は自分の怠慢を責められているような気がした。と同時に、彼女に対するいとおしさが、じりじりと胸にじんだ。

「かまやせん、かまやせん、なんぼ書いたちうて、今度からわしがみんな消してしもうてやら」

彼は決してセイを悲しませてはならないと考えたのである。

「たのまあな」

彼女はうれしそうに、はじめて細面の頬にいつものほのかんだ微笑をうかべて、それから **B** をかるく噛みしめた。

寺の本堂の方から、住持注二の読経が抑揚高らかに洩もれていた。

「じゃけどな、岩やん、用心してな」

注一 山海経二 古代中国の地理書。

注二 史志二 歴史記録。

注三 輿地二 地理。

注四 籌海図編二 明朝後期に編まれた日本研究書。

注五 影響二 伝聞で根拠がないこと。

注六 中土二 中国。

注七 朱竹垞二 清朝初期の学者、朱彝尊しゆいそんのこと。竹垞はその号。

注八 吾妻鏡二 鎌倉幕府が編纂さんしたとされる歴史書。

注九 士大夫二 王朝体制時の中国の支配層、官員層およびそれを支える知識層の総称。

注十 足迹二 足跡。

注十一 謬悠二 だらけで根拠がないさま。

注十二 紀載二 記載。

注十三 一噓二 一笑。

問一 傍線部(1)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。

問二 傍線部(2)を現代語訳しなさい。

問三 傍線部(3)の理由を簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部(4)の「隔衣帶水」は、ある四字熟語に由来する表現である。最初の一字を加えてその四字熟語を完成させ、かつ傍

線部の意味を述べなさい。

問五 傍線部(5)のような思いを筆者が抱いた理由を説明しなさい。

問題 四

次の文章は、清朝末期に外交官として日本を訪れた黄遵憲がその際の体験、印象をまとめた詩文集の一部である。これを読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、訓点を省略した箇所がある。)

山海経注一已述倭国事。而歴代史志注二、於輿地風土注三、十不二真注四、專書惟有注五、籌海函編注六。然所述薩摩事注七、亦影響耳。唐人以下、送日本僧詩至多注八、曾不及風俗。日本旧已有史注九、因海禁嚴注十、中土不得著於録。惟朱竹垞注十一、收吾妻鏡一部注十二、故不能詳注十三。士大夫足迹不至其地注十四、至者又不讀其書注十五。謬悠無足怪也注十六。日本与我僅隔衣帶水注十七、彼述我事注十八、積屋充棟注十九、而我所紀載注二十、彼第以供一噓注二十一。余甚惜之注二十二。

(清・黄遵憲『日本雜事詩』による)

「うん？ 何を——？」

「何をつて、消しとるところを、人に見られちゃ、いけんもの」

「誰かに見られたん？」

「ん、あのな、こないだ私、ひとりで消しようたら、お住持じゅうつあんに見られてな」

「……………」

「あんたはええ子じゃ、感心な子じゃ言われてな……」

「ふ、ふ、ふ」

二人は憂わしげな顔に、仕方のないおかしさを含ませて、さびしく笑って顔を見合せた。

もう夜が近づいていた。鐘つき堂の夫婦松の間から、少しさむそうにして半月がのぞいていた。家を気にするセイを先に帰した岩助は、ひとり後に残って、残りの落書を草履で拭っていた。

それから数日の後。

岩助の小学校では今しも朝会が行われていた。朝の光を浴びながら、全校生徒が隊伍たいぎをつくって校庭の真中に並んでいた。男は右側に女は左側に、下級生は前方に上級生は後方に。生徒と向い合って、十人の教師がほどよく間隔をへだてて佇たっていた。

「敬礼ッ！」

赤い襷たすきをかけた当番の教師が号令を高く響かせた。五百の生徒が一樣に、秋風になびく尾花のように腰をかがめて頭を垂れた。松の生木で作った台の上に、痘痕あばたの校長が上っていた。校長は生徒たちの敬礼をべこんと顎あごで受けると、いつものように半歩ばかり前にすすみ出て、腹をぐつと突き出した。

「今朝は皆さんに少々残念なことをお話しして、皆さんの近頃の行儀について、よく反省して貰もらいたいと思います」

校長訓話が始まったのである。何のことであろう、生徒たちの瞳が一斉に、いつになく苦りきっている校長の顔に集中した。

「というのは近頃、皆さんの中には学校から帰って山行きをする者が大分あるようだが、その山行きの行き帰りに……」

岩助はすぐに直感した。ははあ、寺の土塀の落書についての注意するのだな、と。果してそうであった、生徒たちの顔がだんだん、神妙な顔を装っていった。

「あのお寺は一体、和尚さんのお寺というよりも、皆さんの家のお寺なのであります。そのお寺に落書をすると言うことは、とりもおさず皆さんの家に——お父さんやお母さんの顔に落書するのと同じことなのであります。又この村のお寺に、つまらぬ落書があるということは、この学校の顔に落書があると言うことであります。つまりそれはこの学校の大きな面汚しなのであります」

ここまで声をはり上げて訓戒をつづけた校長は、もつともな様子を装っている生徒たちを満足そうにぐるりと見廻した。そして人に気づかれないほどのずい微笑を赤いチヨビ髭のほとりにたたえながら、胸のポケットから小さな手帳をとり出した。それから前よりもいくらか声を下げて話をつづけた。

「そこで皆さん、私は、誰と誰々がそのような悪い行いをしたか、ちゃんと知ってはおりますが、……けれども……中にはそのような者と反対に、立派な行いをしている者も中にはありません。佐々木セイの如きは、そのつまらぬ落書を一生懸命になって消しているのを見た人があります」

列のところどころから、小さな囁きが起つて、生徒たちの瞳が尋五女の中央にたっているセイに集まった。注四

岩助の胸がにわかに、得も言えぬ渦巻きをはじめて来た。でもそつと頭を左に動かして、ぬすむようにセイの後姿に目をやると、彼女はその日に焼けた顔はもちろん、首筋から耳朶までも真赤にして、恥ずかしそうに俯向いていた。

「横見をするんじゃない、前を向いて！」

当番の教師が大声を高く張り上げた。にも拘らず、一度崩れたどよめきは、直ぐにもとの静肅にかえろうとはしなかった。

校長は尚も、セイの善事について褒言をくりかえした後、話をまたもの方へ引戻して、

「それにひきかえ、誰と誰々がそのような悪い落書をしたかは、私は、ここでは言いません。銘々が胸に手をあてて考えれば分ることであるし、今日は調べもしますが、この台の上から見ていると、悪いことはできませんので、そんな生徒の顔には、私が

(次のページにも問題があります。)

問二 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問三 傍線部①「あやしう」とあるが、「少将」はなぜこのように思ったのか、簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部②「文書く」とあるが、この手紙で「あこぎ」は相手（和泉殿）にどのようなことを訴えているのか、手紙の趣旨がよくわかるように簡潔に説明しなさい。

問五 女君の歌（Ⅱ）は、少将の歌（Ⅰ）に対し、どのように答えているか、（Ⅱ）の「うつる」が掛詞になっていることに注意して簡潔に説明しなさい。

そんな悪いことをしました、落書は私が書きましたと、ちゃんと表われております」

と校長一流の説話を続けたのである。

その時岩助の背後から、おかしさを堪えた忍び笑いが彼の耳に漏れて来た。無論、毎朝の石を噛むような校長の訓話などは、今では生徒たちには馬の **C** の風に等しくなっていた。しかも訓話が長びけば長びくほど、彼等の型ばかりの緊張は緩んで来るのであった。

忍び笑いはそここに感染した。岩助はそれが何を意味するかを身に感じた。で、わざと校長の方を正視して平静を装っていた。にも拘らず、さげすみの瞳は幾十も、何の遠慮もなく彼の顔をめがけて集まって来た。

（木山捷平「うけとり」による）

注一 半幅帯Ⅱ幅が普通の帯幅の半分の帯。子供の帯や、大人の浴衣などに用いる。

注二 うけとりⅡある仕事の量を決めて引き受けさせること。ここでは松葉をかき集めて来る子供達の仕事を指す。

注三 住持Ⅱ一寺を管理する主僧。住職。

注四 尋五女Ⅱ旧制の小学校尋常科五年生女子のこと。なお、岩助は一つ上の尋常科六年生の設定である。

問一 **A** **C** には、体の部位を表す漢字一字が入る。それぞれに入る漢字を書きなさい。

問二 傍線部(1)で、岩助が「当惑した」理由について、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(2)で、「セイのこのごろの落着きのない挙動」や「山椒谷にやって来なくなった理由」について、岩助はどのように考えているか、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(3)は、岩助とセイのどのような気持ちを表現したものか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問五 傍線部(4)の「忍び笑い」はどのようなことを意味すると考えられるか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

次の文章は、「女君」のもとへ「少将」が訪れて一夜を共にした、その翌朝の場面である。少将は、女君が継母に冷遇され、食事など用意できそうにないことを知っているが、女君はそのことをつらく思っている。これを読んで後の問に答えよ。なお、「あこぎ」は女君の侍女、「帯刀」は少将の乳母の子である。

女君は、わりなう苦しと、思ひ臥したまへり。あこぎ、いと清げに装束きて、いと清げに化粧して、帯ゆるるかにかけて参る後姿、たけに三尺ばかり余りて、「いとをかしげなり」と、帯刀も見送る。「この御格子はまゐらでやあらむずる」と一人言して参るを、少将の君もゆかしうて、「『いと暗し、あげよ』とのたまふめり」とのたまへば、物踏み立ててあげつ。男君起きたまひて、御装束したまひて、「車はありや」と問ひたまふ。「御門に侍り」と申せば、出でたまひなむとするに、いと清げにて、御粥まるりたり。御手水とり具して参りたり。「あやしう。便なしと聞きたまふるほどよりは」と思す。女君は、いとあやしう、「いかで」と思ひたまへり。雨少しよろしうなれば、騒がしうあらねば、やをら出でたまひなむとす。女君の御方を見たまへば、まめやかにいとうつくしければ、いとど限りなく思ほしまさりて、いとあはれと思す。粥など少しまゐりて臥したまひぬ。

夜ざりは三日の夜なれば、「いかさまにせむ。今宵、餅、いかでまゐるわざもがな」と思ふに、またいふべきかたもなければ、和泉殿へ文書く。

「いとうれしう。聞こえさせたりし物を、賜はせたりしなむ、よろこびきこえさする。またあやしとは、思さるべけれど、今宵餅なむ、いとあやしきさまにて、用侍る。取り交すべきくだ物など侍りぬべくは、少し賜はせよ。客人なむ、しばしと思ひ侍りしを、四十五日の方違ふになむ侍りける。されば、この物どもはしばし侍るべきを、いかが。盥、半挿の清げならむを、しばし賜はらむ。取り集めていとかたはらいたけれど、頼みきこえさするままに」とて、やりつ。

注八 つねの御許より、ただ今、

注九 よそにてはなほわが恋をます鏡うつる影とはいかでならまし

(I)

とあれば、今日なむ御返り、
注十一 身をさらぬ影と見えてはます鏡はかなくうつることぞかなしき

(II)

『落窪物語』による

- 注一 わりなう苦し||少将に対して食事が用意できないことをつらく思っている。
- 注二 ゆかしうて||少将は「女君」や「あこぎ」の姿を明いところで見たいと思っている。
- 注三 出でたまひなむ||少将は食事などが用意できないと思つて「女君」のもとをそのまま辞去しようとしている。
- 注四 三日の夜||正式な結婚の成立する三日目の夜に「餅」を用意して祝う。
- 注五 和泉殿||あこぎの叔母を指す。叔母はあこぎに対し、これまで援助してきたが、詳しい事情は知らない。
- 注六 四十五日の方違ふ||四十五日の長期にわたる方違え。思いがけず長期滞在する客人がいると嘘をついている。
- 注七 半挿||湯や水を注ぐための器。「はんざぶ」とも。
- 注八 つねの御許||少将のこと。
- 注九 よそにては||あなたと離れていると、の意。
- 注十 ます鏡||真澄鏡の意。澄んだ鏡。
- 注十一 身をさらぬ影||我が身を離れない姿、の意。

問一 二重傍線部A「のたまふ」、B「たまひ」、C「きこえさする」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか、文中の語で答えなさい。